

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01650

研究課題名(和文) 留学生のメンタルヘルスに関する包括的な研究

研究課題名(英文) Comprehensive studies about mental health among international students at Japanese universities

研究代表者

阪上 優 (Sakagami, Yu)

京都大学・環境安全保健機構・准教授

研究者番号：50437290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：京都大学・大阪大学・名古屋大学の多施設共同研究により、留学生のメンタルヘルスの実態を明らかにした。深刻な事例の多くは、1)被害妄想を伴う急性精神病状態もしくは、2)ひきこもりを伴う抑うつ状態であった。1)と2)の病態に関して、臨床疫学的解析を行い、発病の機序やリスクファクターが違つことを明らかにした。また、留学生のメンタルヘルスに関するスティグマの分析を行い、統合失調症に関するスティグマの深刻さを明らかにした。加えて、22歳を区切りとして、思春期と青年期に分類した場合の、各々の発病の機序やリスクファクターの差違を明らかにした。以上の学術的成果は、複数の国際学術誌や国際学会で発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際高等教育におけるグローバル化は急速に進行している。しかし我が国においては、留学生のメンタルヘルスに関する、多施設共同研究や質的・量的研究を含む包括的研究はなされていなかった。本研究では、留学生のメンタルヘルスに関する、多施設共同研究を実施し、記述疫学的特徴、予後不良群(死亡例や退学例)の危険因子解析、スティグマに関する解析、支援の在り方、受療行動等、網羅的に分析を行った。留学生の支援に関する統合的かつ具体的な提案を、学術活動やアウトリーチ活動を通じて積極的に行った。

研究成果の概要(英文)：We have implemented a multi-institutional joint research about the mental health among international students at Kyoto University, Osaka University, and Nagoya University. We analyzed the characteristics of mental health and the mechanism of the onset about mental illnesses among international students. We revealed that the severe cases can be classified into two categories, acute psychosis with a persecution and hikikomori with depression, and that there are great differences in both psychological pathology and descriptive epidemiological characteristics between two categories. In addition, we studied the stigma against mental illnesses and the differences of mental health between adolescents and young adults in international students. We reported the detail of the results of our studies at academic journals and presented it at academic conferences.

研究分野：社会医学

キーワード：社会医学 臨床精神医学 国際高等教育 渡航医学 ヘルスコミュニケーション 大学保健 精神保健

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 気分障害および神経症性障害, ストレス関連障害及び身体表現性障害関連疾患群 (ICD10 のコード分類による F3 および F4 疾患群)

多文化間精神医学の観点からは, そもそも留学は, メンタルヘルスに関するリスクファクターであることが知られている。留学生は, 語学学習, 異文化適応, 青年期の葛藤など, 解決すべき多くの問題を抱えている上に, 現地学生に比して, 利用できるリソースに乏しく, また情報も限定されている。留学生のメンタル不調においては, 気分障害関連疾患群 (F3 疾患群) と適応障害関連疾患群 (F4 疾患群) は, 最も頻度が高い疾患群であるが, 重症化した場合には, ひきこもりや自殺企図などを呈し, 言語の問題や本国とのやりとりなどを含めて, その対応は困難を極めることが多い。我々の行った先行研究では, 留学生の予後不良の F3・F4 疾患群は, 出身地域に統計学的有意差がなく, また, そもそも, 母国での適応が不良であった傾向が認められたが, サンプルサイズの不足によって, リスク要因を十分に検出することができなかった。本研究では, 多施設共同症例対照研究によってサンプルサイズ不足の問題を解決し, F3 および F4 疾患群に関する重症化因子を明らかにし, その予防策を考察することを目指す。

(2) 統合失調症, 統合失調症型障害及び妄想性障害関連疾患群 (ICD10 のコード分類による F2 群)

渡航先では, 急性に妄想状態や錯乱状態を呈する例があり, 留学生のメンタルヘルス支援においてもその予防に関心が払われる。我々が5年間行った後ろ向き調査では, 6例の統合失調症関連疾患が確認されており, うち重症5例は, 医療保護入院1例, 措置入院1例, 強制入院1例を含め, 退院後は全例, 帰国の途につかざるを得なかった。全症例とも, コミュニケーションの障壁や国家間における教育システムの違い, 異文化適応の問題, 人間関係の乏しさなど, 留学生という立場に特有の問題のために大学におけるコミュニティから逸脱傾向にあることが障壁となり, 早期発見に至らなかった。既に増悪した後に介入すると, 警察通報などによる行政介入も含めた多大な困難を生じるため, 統合失調症関連疾患群においても, リスク要因の検出による早い段階での介入が必要である。本研究では, 多施設共同症例対照研究によって, サンプルサイズ不足の問題を解決し, F2 疾患群に関する重症化因子を明らかにし, その予防策を考察することを目指す。

以上のように, 留学生の早期のメンタルヘルス支援は極めて重要であり, スクリーニングに用いるリスク要因の検出が即急に求められる。しかし上記の疾患群に関する既報の考察は, いずれもケースシリーズや専門家による意見であり, バイアスが想定される結果であるため, 有症率や関連する要因など, 精神疾患の詳細な統計的実態は明らかになっていない。そこで, われわれは, 多施設共同研究によって外的妥当性を担保し, 精神疾患の有症率やリスク要因を一般化した形で明らかにすることを目指す。

2. 研究の目的

本研究の目的は, 多施設共同症例対照研究を通して, 留学生の精神疾患のリスク要因を抽出することを主目的とする。本結果を国際教育現場に還元することにより, 留学生の精神疾患の

予防と早期発見のための対応指針がより具体的になると考える。さらに、今後、急増する留学生支援のための人員や予算配分の根拠となることが期待される。

3．研究の方法

多施設共同症例対照研究およびメンタルヘルスに関する後ろ向きコホート研究

4．研究成果

京都大学・大阪大学・名古屋大学の多施設共同研究により、留学生のメンタルヘルスの実態を明らかにした。

(1) メンタル不調者のリスク因子

非正規生、中でも研究生は、受療のタイミングが遅く、深刻化してから医療に繋がる傾向が明かであった。出身地域別においては、アジア圏、特に漢字文化圏出身の学生にメンタル不調が有意に少なかった。一方、地理的距離や文化的距離が遠く、同国人の数が少ない出身地域の学生ほど、メンタル不調が有意に多かった。明らかな性差は認められなかった。

(2) 年齢によるメンタルヘルスの特徴

年齢による各精神疾患の有病率に、明らかな有意差は認められなかった。しかし、主要なストレスナーにおいては、22歳以下の思春期に相当する留学生は、大学内における人間関係によりストレスを感じていた。一方、異文化適応によるストレスは、23歳以上よりも軽度であった。また、受療行動においては、23歳以上と比較して、自ら医療機関を受診することは少なく、help seeking behavior が未成熟であることが示唆された。22歳以下の留学生の支援においては、医療には特化せず、生活支援やピア・サポートなど、より身近な支援を手厚くする必要があると考えられる。

(3) 深刻な事例について

深刻な事例のおおくが、被害妄想を伴う急性精神病状態もしくは、ひきこもりを伴う抑うつ状態であった。急性精神病状態を呈する学生は、ひきこもりを呈した学生よりも、発病の経過が短かった。また、地理的または文化的距離の遠い出身地域の学生に有意に多かった。一方、ひきこもりの学生については、出身地域に有意差は認められなかった。ひきこもりを呈した学生は、本国ですでに不適応や精神的既往歴を有している比率が有意に高かった。受け入れ大学においては、受け入れの可否の吟味や、受け入れ前などの準備の重要性が示唆された。受け入れ後は、学校医や指導教員、留学生支援職員などがネットワークを形成して支援をすると共に、本国の保護者との連携も重要であると考えられる。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

Jiro TAKEUCHI, Yu SAKAGAMI (Corresponding Author), Stigma among

International Students is Associated with Knowledge of Mental Illness, Nagoya Journal of Medical Science, 査読有, 80 (3), 2018, 367-378

<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC6125660/>

阪上 優 (Corresponding Author), 村田吉司, 思春期・青年期の well-being と主体価値 : 異文化体験と心の発達, 日本社会精神医学会雑誌, 査読無(招待), 28 (1), 2018, 60-65

武内 治郎, 阪上 優, 有効なアンチスティグマ活動を展開するために: 過去の文献レビューと自験例における予備解析結果から, 日本精神神経学会雑誌, 査読有, 119 (9), 2017, 650-657

<https://journal.jspn.or.jp/Disp?style=abst&vol=119&year=2017&mag=0&number=9&start=650>

阪上 優, 近藤 圭一郎, 共感性から読み解くグローバルゼーションと臨床精神医学, 臨床精神医学, 査読無(招待), 47 (2), 2018, 121-128

野田 実希, 阪上 優, ワーク・ライフ・シフトと産業精神保健, 臨床精神医学, 査読無(招待), 47 (2), 2018, 163-168

Yu Sakagami (Corresponding Author), Teruhisa Uwatoko, Jiro Takeuchi, International students' mental health issues Kyoto University: A retrospective cohort study, Journal of International Student Advisors and Educators, 査読有, 17, 2015, 7-17
<file:///C:/Users/sakagami.yu/Downloads/InternationalstudentsmentalhealthissuesatKyotoUniversityAretrospectivecohortstudy.pdf>

川岸 久也, 武内 治郎, 阪上 優 (Corresponding Author), 短期留学プログラムを完遂できなかった学生の事例研究, CAMPUS HEALTH, 査読有, 52 (2), 2015, 113-118

[学会発表](計 16 件)

阪上 優, 思春期・青年期における基本的価値観に関する被影響体験と心の健康: 日本の大学における調査研究, 精神保健に関する委員会シンポジウム, 2019

阪上 優, 困難な状況における大学生の心の健康と主体価値の諸相, 第 114 回精神神経学会学術総会, 精神保健に関する委員会シンポジウム, 2018

阪上 優, リンダグラットンから学ぶワーク・シフト 主体価値と働くことの意味を考える, (株)日本郵政グループ 京都通信病院健康管理講演会(招待講演), 2018

阪上 優, 多文化共生と主体価値変容 留学生の健康支援の立場から, 第 40 回全国大学メンタルヘルス学会総会(招待講演), 2018

阪上 優, 新時代のQuality of Working Life (QoW)を考える, 第11回 近畿地区国立大学法人安全衛生管理連絡会 (招待講演), 2018

阪上 優, 海外渡航における健康管理の要諦, 京都大学医学研究科健康管理講演会(招待講演), 2018

大槻真子, 阪上 優, 大学生における主体価値の被影響体験の諸相, 第10回 日本ヘルスコミュニケーション学会学術総会, 2018

阪上 嶺, 大槻真子, 価値の被影響体験のうちのポジティブ体験はメンタルヘルスに影響があるか否か, 第10回 日本ヘルスコミュニケーション学会学術総会, 2018

阪上 優, 思春期・青年期の well-being と主体価値 ~ 異文化体験と心の発達 ~ (招待), 第37回日本社会精神医学会, 2018

齋藤 暢紀, 梁瀬 まや, 檀尾 公宏, 上床 輝久, 武本 一美, 阪上 優, 村井 俊哉, 留学で来日中に抑うつを呈し, 多職種による環境調整が効果的であった一例, 第119回日本精神神経学会近畿地方会, 2016

Yu Sakagami, Jiro Takeuchi, International Students' Mental Health Issues at a Japanese University: A Retrospective Cohort Study, World Federation for Mental Health, Regional Congress, 2015

Miki Noda, Yu Sakagami, A Qualitative Study on Self-Consciousness among Workers in the Process of Receiving Mental Health Services in JAPAN, World Federation for Mental Health, Regional Congress, 2015

Jiro Takeuchi, Yu Sakagami, Understanding and Influencing the Stigma of Mental Illness among International Students, World Federation for Mental Health, Regional Congress, 2015

Yu Sakagami, International students' mental health issues at Kyoto University: A retrospective cohort study, 大学の世界展開力強化事業採択大学連絡会, 2015

阪上 優, 留学生における精神疾患に対するスティグマと精神保健教育, 第111回精神神経学会学術総会, 2015

阪上 優, 大学における留学生が抱えるメンタルヘルス問題, 第111回精神神経学会学術総会, 2015

〔図書〕(計 2 件)

阪上 優 他, アークメディア, 臨床精神医学 特集 グローバリゼーションと臨床精神医学 47 巻 2 号, 2018, 94

阪上 優 編, 田中プリント, 異文化適応と留学支援ハンドブック: 多文化共生とヘルスコミュニケーションの立場から/Guide to Intercultural Adaptation and Study Abroad: From the Perspective of Multicultural Coexistence and Health Communication. English/Japanese, 2017, 221

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

〔その他〕

<http://www.sakagamilab.esho.kyoto-u.ac.jp/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 足立 浩祥

ローマ字氏名: Hiroyoshi Adachi

所属研究機関名: 大阪大学

部局名: キャンパスライフ健康支援センター

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 00303785

研究分担者氏名: 酒井 崇

ローマ字氏名: Takashi Sakai

所属研究機関名: 名古屋大学

部局名: 国際機構

職名: 特定講師

研究者番号(8桁): 70761675

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 武内 治郎

ローマ字氏名: Jiro Takeuchi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。

そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。